

若草の上に二人並んで座り、豪華な手弁当を頬張る私に妻が訊く。

「おいしい？」

「うん！」

「よかった。ゆうべから手間をかけて仕込んだのよ」

夫に舌鼓を打たせる幸せな女の顔――。

今朝早く都内のS駅を出発した日帰りバスハイクで、このY県の山里まで来た。晴天に恵まれたのありがたい。参加のハイカーは私たちのような中高年夫婦ばかりで、みな思い思いの処に腰を下ろして、青空の下の昼食を楽しんでいる。

弁当を平らげ、妻が携帯ポットから注いでくれた珈琲を味わいながら、遠い残雪の山並みを見やった。

「何か考えてるの？」

「いや、ちよつと故郷の山に似てるような……」

妻も遠くに目を遊ばせて応えた。

「あなたは故郷があつていいわ。私は東京だけだから」

それから、傍らの微風にそよぐ白木蓮の花に目を移して言った。

「うちの紫木蓮もゴージャスでいいけど、白も風情があるよね」

「ああ、可憐でいいな。俺はこれも好きだな」そう言つて、一言加えた。

「ゴージャスな紫木蓮の方が、君のイメージに近いけどな」

妻が含み笑いで返した。

「あなた、ほんとは可憐なタイプの方が好きなんじゃない？」

こうした何気ない会話が大切なのだ。どうでもいいような言葉のキャッチボールが必要なのだ、夫婦には。そのために私はここまで来ている。

弁当箱やポットをナツプサックにしまい、また次のコースを歩くために腰を上げた。歩き出した妻の足取りは軽やかで、ジョギング並みに速い。軽く息を弾ませている。心も弾んでいるのが分かる。二人でこのハイキングに来てよかつたということだ。

「おい、ちよつと、ペースを落としてくれよ。ついてけない」

「だめよ。汗をかいたために来たんだから」妻は笑いながら応じて、付け足した。

「あなたもちよつと痩せなきゃ」

息を切らせながら頼んだ。

「俺は、これで標準、だよ。君だつて、ナイスバディなんだから、それで、丁度いい、体型じゃないか。ちよつと待ってって」

ペースダウンした妻に追いついて手を握った。妻も握り返してきた。周囲のハイカーたちの中に、手をつないで歩く夫婦は他にいない。

薫風に揺れる麦畑の海を抜け、新緑の溪谷の橋を渡った。つい仕事も忘れるほどの美しい

景色の中を二時間ほど歩き、ようやくゴール地点の温泉施設にたどり着いた。妻が用意してきたタオルを受け取り、後でレストランで落ち合うことにして湯に入った。

疲れた脚を鉱泉の湯で揉みほぐしてからレストランに入った。窓際の席ですでに湯上りのビールを楽しんでいた妻は、悪戯っぽくグラスを掲げ、微笑んでみせた。

帰りのバスの中で、私は心地よい疲労感からのまどろみに落ちた。添乗員のマイクの声で目覚めると、妻も私の肩に体を預けて眠っていた。

改めてその顔を覗き込んだ。生きることの様々な疲れと年齢を隠しようもなく浮かせながらも、美貌と言ってよい整った顔立ち。安らいだ寝顔――。

バスは夜の八時にS駅に帰り着いた。

舞い戻った日常の、電飾と喧騒の街を並んで改札口付近まで歩いた私たちは、雑踏を避けて柱の陰に身を寄せ、しばし顔を見合わせた。

先に口を開いたのは「妻」だった。

「ありがとう。初めてで、最初はちよつと不安だったけど、ほんとに楽しかった」

会釈した私の目をまっすぐに覗き、仄かな緊張を滲ませて語を継いだ。

「またそのうち…お願いできる？」

社交辞令とも思えないその目の色は、私の男としての、プロとしてのささやかな矜持を充たしてくれる。今日も一人の女の人生の、小さなパーツになれた。

「勿論です。喜んで」

依頼者の目をまっすぐに見返して軽く微笑み、丁寧に続けた。

「どうぞ、またメールでご利用下さい。お待ちしております。スケジュールさえ合いましたら、何処へもお供いたします」

満足気な笑みと共にうなずいて踵を返した彼女を見送った。その背はたちまち巨大駅の人波に紛れ、大都会の渦に消えた。

彼女の境涯は知らない。

本当にゴージャスな紫木蓮のある家に住んでいるのか、孤閨なのか家族がいるのかなどは、私の与り知らぬこと。ビジネスとして規定の料金さえ払ってもらえれば、法に触れぬ限りは、客の求める舞台のどんな一幕にでも寄り添う。役柄が仮初めの「パートナー」であろうと、「友人」であろうと、全力でその務めを果たす。

私も群衆を縫い、待つ者もないアパートへの帰路についた。